

声明 10.13「徳山ダム建設事業竣工式」に寄せて
～ 祝えない徳山ダム竣工(式)、心に刻まれるべき過ち～

2008年10月11日

徳山ダム建設中止を求める会(代表 上田武夫)

10月13日、水資源機構は「徳山ダム建設事業竣工式」を揖斐川町で行うという。新聞で見た気はするが...と水資源機構中部支社及び徳山管理所のHPを見たが、載っていない(10月11日10時現在)。

水機構中部支社に問い合わせると、岐阜県知事、岐阜県議会議長、中部電力(株)社長、国交省河川局長、国交省土地・水資源局水資源部長、国交省中部地方整備局長などが参加するという。これだけの顔ぶれを一堂に集める「式」は、滅多にあるものではない。にもかかわらず、HPに載せないところに、この竣工式が「祝!」とならない(建設した側の)重たい事情が窺える。

私たちが「徳山ダム建設中止を求める会」を立ち上げたとき、すでに補償交渉を終えて移転した徳山村の人々の多くは(公式的には)「早く完成した徳山ダムを見たい」とおっしゃっていた。しかし、今となっては、「徳山村民の苦渋の選択が、こうして形になって嬉しい、祝いたい」という声は、ほとんど聞こえてこない。むしろ「こんなはずではなかった」「約束が反故にされた」という恨みに近い声が聞こえる。湛水開始強行直前の過酷な労働による水資源機構の職員の自殺もあった(それは残業時間の多さ以上に業務内容の酷さによる精神的疲労ゆえ、と徳山ダム建設所 - 当時 - の中でも言われていた)。

造って喜ばれないものを何故造る? 「決まっているから?」「動き出したから止められない?」

徳山の人々から故郷を奪い、人の命を奪い(労災事故死者もいる。徳山から移転したお年寄りの平均寿命が短い、という調査結果もある)、巨費を投じて何十年も先まで重いツケを残し、生物多様性を破壊して(RDB絶滅危惧1B類のイヌワシ・クマタカは「モニタリングで見守る」以外の保護策は何もない)、岐阜県民・流域住民は、一体何を得たのであろうか?

河川管理者は「9月2-3日の西濃豪雨では洪水調節に役だった」と宣伝しているが笑止である。たとえ「基準地点・万石での1.2mの水位低下効果」が事実としても、もともと計画高水位よりずっと低い水位の洪水に対しては、ダム等の洪水調節施設は要らない(=標準的な「計画」のありよう)。今般のような流域全体の総雨量としては少ない - 万石の水位は低い - につき、「ダムによる洪水調節による水位低下効果」を大宣伝するのは、計画高水位よりずっと低い水位でも破堤しかねない脆弱な堤防だらけであることを、河川管理者が自覚しているからに他ならない。また、このような局地的豪雨が「再び揖斐川本川と揖斐川左岸の真上にだけ降る」確率は極めて低い。もし今回の降雨の場所が10kmずれていたら、大災害となったかもしれない。川の最上流部の巨大ダムの「洪水調節」に頼る治水は危うい。

徳山ダムに優先的に巨費を投じたために、岐阜県 - 木曾川水系では堤防強化等の河川改修事業は遅れて来た。岐阜県の「新五流総」パンフ(徳山ダム「効果」織り込み済み)にも「一向に浸水被害が減少していません」とある。法律上水道事業者が支払うべき「徳山ダム水源費償還金」毎年約23億円が、一般会計(岐阜県河川課決裁分)から今後23年間支出されていくという。要らない水を開発してしまったゆえの異常な事態である。

とうとう、誰も心から祝うことのできない「徳山ダム建設事業竣工式」となってしまった。

徳山ダム建設は、長良川河口堰建設と並ぶ「世紀の愚行」である。そして「徳山ダム」は、木曾川水系連絡導水路問題など、さらなる問題を発生し続けている。徳山ダム建設は、同じ過ちを繰り返さないための巨大なモニュメントとして、心に刻むべきであろう。

以上

連絡先：徳山ダム建設中止を求める会(代表 上田武夫)

<http://www.tokuyamadam-chushi.net/>

新規開設

事務局・連絡先：近藤ゆり子

TEL/FAX 0584-78-4119